



【執筆者一覧】

序章：東京都健康長寿医療センター研究所 岡村 毅

事例1：農都共生総合研究所 引間 彩・川辺 亮

事例2：農都共生総合研究所 川辺 亮・引間 彩

事例3：東京都健康長寿医療センター研究所 宇良 千秋

事例4：東京都健康長寿医療センター研究所 岡村 毅

事例5：農都共生総合研究所 川辺 亮・引間 彩

事例6：宮城大学 作田 竜一

事例7：宮城大学 佐々木 秀之・神尾 真太郎

事例8：農都共生総合研究所 川辺 亮・引間 彩

専門家コラム

1.高知県立大学 矢吹 知之

2.文京学院大学 山崎 幸子

3.東京大学 別所 あかね

4.一橋大学 キム ホンジク

5.東京都健康長寿医療センター研究所 宇良 千秋

終章：千葉大学 吉田 行郷

農林水産省農福連携推進室 室長 渡邊 桃代



序章

本誌は様々な課題を抱えている高齢者の医療やケアにおいて、「農」が解決の鍵になるのではないかと提案するものです。「農」をうまく使うことで、我が国の高齢者の医療やケアの現場をもっと明るく、楽しく、地に足の着いたものにドラマチックに変革できるかもしれません。高齢者の医療やケアをとりまく環境は劇的に変化しています。第一は高齢者の増加です。今世紀半ばには人口の40%が高齢者となります。第二は認知症の人の増加です。多くの身体疾患が治るようになりましたが、認知症は進行を遅らせることが多少できるだけですから、認知症の人が増えるのは当然のことです。第三は地域包括ケアシステムといわれる、施設から地域への動きです。第四はいたずらな延命だけを志向するのではなく、生の質(QOL)、そして死の質(QOD)の重視です。第五は、家族や地域の力が徐々に低下する中で孤立孤独を抱えている高齢者が増えていることです。

かつての医療は、病気を治せば、あとは地域に戻って元気に働くというモデルでした。しかし現在は「高齢者が増え、認知症の人も増え、慢性疾患と共存する人が増えた。彼らは地域に住んでいるが、孤立孤独という問題を抱えている。ただ生きていけばよいのではなく、QOLやQODを考えて支えなければならない」ということです。

今の医療・ケアの資源でできるでしょうか？

私たちは、ヒトが1万年以上営んでおり、人類の「基本動作」ともいえる農に注目しています。農は都市を含めてあらゆるところで行われており、新たな土地取得も不要です。孤立孤独を抱えた特に男性高齢者も、農園では楽しく過ごすことができます。今ある農と、医療やケアをうまく繋ぐことができないか。歳をとっても、美しい農園でみんなの為に美味しい野菜や果物を育てる、認知症になっても閉じ込められるのではなく農園で過ごす、そして美しい自然に囲まれて、生まれてきてよかったなと思いつつ死ぬ、私たちはそういう未来を夢見ています。

私たちの目標がそう簡単に達成されるとは思っていません。本書では東北地方の各所で自生的に始まっている農を用いた素敵なケアを紹介し、分析するものです。本書を手にとった皆様が、「これならできるかもな」「自分の地域で無理なくやる方法を考えてみよう」と思って頂ければ幸いです。

東京都健康長寿医療センター研究所 岡村 毅

contents

事例 1 青森県蓬田村 3・4p

青森県蓬田村 蓬田担い手育成 総合支援協議会

高齢者が楽しく無理のない範囲で自分にできることをできるだけ行うことで、介護予防の促進に繋がることを目的としています。

事例 2 青森県むつ市 5・6p

『むつ下北 援農ボランティア』 合同会社 むつつのたね

まちづくりの専門家として下北地域の食の伝道師となり、農業者とのネットワークがつけられ、『むつ下北 援農ボランティア』を開始しました。

事例 3 秋田県藤里町 7p

藤里町 社会福祉協議会

介護事業、若者支援、生活支援、町づくりなどを幅広く行っています。

事例 5 岩手県八幡平市 9・10p

NPO法人 里・つむぎ八幡平 一般社団法人 すばる

「里・つむぎ八幡平」は、デイサービス・住宅型有料老人ホーム、グループホーム、小規模多機能ホーム他、里つむぎ農園などの運営を通して地域ニーズを汲み取り、安心して楽しく暮らせるサポートを行っています。

事例 4 秋田県東成瀬村 8p

株式会社 風鈴

無理はしない、できることをする、利用者(高齢者)に聞きながらのんびりやるという姿勢で、とにかく楽しむ、遊ぶという姿勢が徹底しています。

事例 6 宮城県登米市 12・13p

本田ファーム

地域の耕作放棄地を活用し、町内会活動の一環として、農的活動を展開しています。高齢者の方のやりがいづくりや健康増進、世代間交流や見守り活動など、多様な社会的意義を発揮しています。

事例 8 福島県郡山市 15・16p

かたひらの畑

高齢者と活動を共にする時間と場をつくりながら、高齢者から学んだ、かたひらの畑のキーワードである「お裾分け」や「捨てない」がみんなの活動規範になればと考えています。

事例 7 宮城県仙台市 13・14p

向陽台連合町内会 向陽台ささえ愛の会/ 青空サロン

宮城県仙台市泉区の古いニュータウンの住宅地における町内会活動をベースとした「農的」活動の取組です。

本研究プロジェクトの全体像

厚生労働省東北厚生局のプロジェクトとして、医学研究の手法をベースに、人文系の社会調査の手法を加えて、農を用いた活動を体系的に探索しました。

問題のありか

医療の世界

高齢化により、治すだけ医療から慢性疾患を予防し、共存する医療への転換。多剤併用から社会的処方への関心。

農業の世界

農福連携の推進(農福連携等推進ビジョン、改正食料・農業・農村基本法)。作るだけの農業から6次産業化へ。

農を用いた新しいケアへの関心がかつてなく高まっている。実際に身近でも行われている。しかし・・・

- 社会保障のメニューに入っていないため手弁当で行う事例も多い
- 学問的にも農業経済学、医学、看護学、作業療法学等の学術領域にバラバラに存在しており、共通プラットフォームがない

といった理由で全体像が見えにくい! 探しにくい!

学術機関(東京都健康長寿医療センター、千葉大、宮城大、高知県立大、認知症介護研修センター仙台、文京学院大、東京大、一橋大)、農都共生総合研究所、行政(農林水産政策研究所、農林水産省)などの研究者によるチームを構築し、熟議を行った。

医療系

認知症疾患医療センター

認知症サポート医

農業系

東北農政局ネットワーク

JA

公的組織

県社協・区市町村社協

基礎自治体

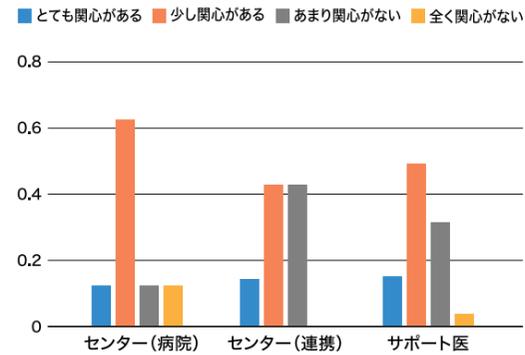
その他

園芸療法士

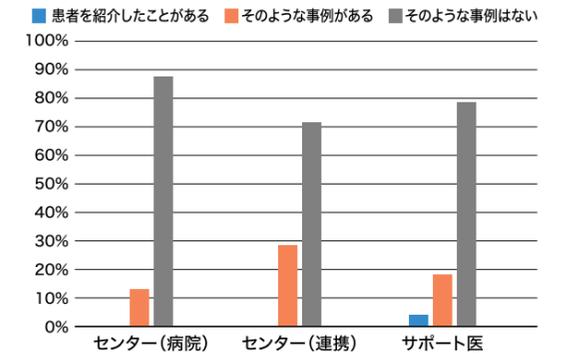
わかったこと

- ① 医療側は農的活動に関心があるが活動実態を知らない。
- ② 営農主体側は患者へのアクセス方法がない。
- ③ 技術の担い手たる園芸療法士は手弁当で活動している。
- ④ J Aと医療の連携は今後の課題²。
- ⑤ 社協の現場ではよい活動があるが、社協内部ですら見落とされる可能性がある³。

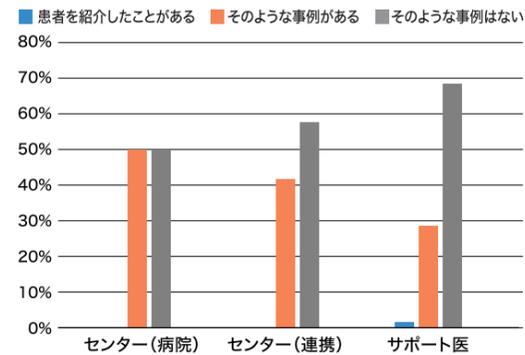
農福連携への関心



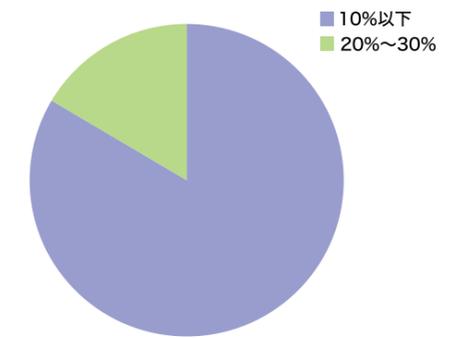
認知症疾患医療センター(病院)は75%が農福連携に関心を持っている。一方で連携型では57%、サポート医では65%にとどまる。



福祉事業者が自ら実施している農的活動については「知っているが、連携はない」という状態である。



福祉事業所が農家に行って作業する活動については知られていないし連携もない。



園芸療法士の仕事をして得られる収入は、10%以下がほとんど。

1. 実際の細部については正式な報告書を参照頂きたい。
東京都健康長寿医療センターのHPで公表予定である。
2. JAの調査に関しては後日報告書にて報告することを予定している。
3. 社協の内部ですら農が見落とされる現象については終章および報告書を参照されたい。



青森県蓬田村 蓬田担い手育成 総合支援協議会



青森県
蓬田村

青森県蓬田村について

青森県の津軽半島東部に位置し、東側は陸奥湾、西側は平野が広がっている自然豊かな地域です。青森市と隣接しており、比較的アクセスが良い場所にあります。

古くから半農半漁の村として、ホタテの貝養殖や米、リンゴの栽培など一次産業が盛んでした。しかし、近年は高齢化と若者の都市圏への流出が続き過疎化の一途を辿っており、令和5年度の高齢化率は43.3%と全国平均の倍近い値となっています。

きっかけ

このような状況が続く中、令和元年度に玉ねぎ生産者や行政、研究者などで組織される「蓬田村担い手育成総合支援協議会」に社会福祉協議会が加わり、地域コミュニティの再生・強化、高齢者の生きがいづくりを目標に、地域の高齢者が玉ねぎの生産やミニトマトのパック詰め作業を担う援農ボランティアを企画しました。

令和2年度のテスト運営を経て、令和3年度から本格的に実施して、たまねぎ生産組合、ミニトマト生産者、行政、社協が連携して事業を実施しています。

高齢者が、ボランティアでつながる仲間とおしゃべりしながらできることや、無理のない範囲で自分のできることをできるだけ行うことで、介護予防の促進に繋がることを目的としています。

活動内容

現在33名の方がボランティアに参加しており、高齢者が28名と8割以上を占めています。参加者は年代関係なく、援農ボランティアでは、玉ねぎの苗つけ、畑の草取り、収穫作業を行います。ミニトマトのパック詰めは、令和5年度で終了し、令和6年度からはミニトマトのヘタ取り作業を行っています。



写真：蓬田村担い手育成総合支援協議会様より提供

ボランティアメンバーを支えているのは、2名のボランティアセンター職員、生活支援コーディネーター1名と、就労的活動支援コーディネーター1名、そして6名の生産者様です。

たまねぎ生産作業は生産者個人の農地を拠点に活動しており、自家用車を利用したアクセスが必要となります。そのため参加者は乗り合いで畑に行っています。

ミニトマトの作業は社会福祉協議会で実施しています。社会福祉協議会は村のコミュニティバスの停留所にもなっているため移動面においては非常に集まりやすいです。

半身不全や車イス生活の方など、身体的障害を抱えている方にも活躍の場を提供しています。

活動による変化

活動回数を重ねるごとに皆で野菜などを持ち寄ってご飯を食べるようになりました。ボランティアの活動期間が終わった後も社会福祉協議会の集いの場で忘年会を開くなど、主体的に交流が生まれています。

集まるという楽しさを求めて、活動がない日や冬の期間も皆で自然と集まるようになり、援農ボランティアによる新たなコミュニティが醸成されていることがわかります。

スタッフの皆様も“就労”と“ボランティア”の明確な線引きが必要であることや、“つながる仲間と集う大切さ”、そこで生まれる“幸福感”などの気づきを得ることができました。

意識したこと

高齢者に参加していただくため、主に“人との繋がりを求めている方”を対象としました。老人クラブなどの集いの場を訪問した際は「つながる仲間と楽しみを持って活動ができる」ということを強調して呼びかけを行ってまいりました。

活動事態は、高齢者に限らず無理のない範囲で活動できる環境づくりを行い、作業に対して責任を感じさせないように生産者と作業量の調整を行っています。

また、“就労”にならないように、常に取り組みの目的である“つながる仲間とおしゃべりしながら楽しくできること”を軸に、活躍の場を提供することも意識しています。

今後

ボランティアに限らず、当事者がまた集いたい・戻りたいと思える居場所づくりを行い、次世代の担い手の方々にも広がるように活躍の場の提供を実施していきたいと考えています。

今後の展望

「つながる仲間とおしゃべりしながら楽しくできること」を最優先にしているため、活動期間以外にも参加者が集まるようになったと考えられます。“就労”と“ボランティア”が曖昧になっていると、心身の負担が増加し心から楽しむことができない高齢者もいると推測できます。蓬田村担い手育成総合支援協議会では両者を明確に分けることで、年代問わずボランティア参加者が農作業を通して人との集まりを楽しむことができたのだと考えられます。

参加者を募る際にも、対象者と活動目的をはっきりと定めていたため、現在の参加者同士の集まりに繋がっていると考えられます。最初から最後まで活動に一貫性を持たせることが重要なポイントになると思います。

【参考】

蓬田村過疎地域持続的発展計画令和3年度～令和7年度(2025.3.17)

<https://www.vill.yomogita.lg.jp/sonsei/keikaku/files/20210917-01.pdf>

蓬田村 第9期介護保険事業計画・高齢者福祉計画(2025.3.17)

https://www.vill.yomogita.lg.jp/fukushi/kaigohoken/keikaku/files/dai9ki_keikaku.pdf

内閣府(2025.3.17)

https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_1.html#:~:text=%EF%BC%881%EF%BC%89%E9%AB%98%E9%BD%A2%E5%8C%96%E7%8E%87%E3%81%AF,28.4%EF%BC%85%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%80%82

『むつ下北 援農ボランティア』 合同会社 むっつのたね

青森県むつ市について

本州最北端の下北半島に位置し津軽海峡・太平洋・陸奥湾の3つの海に囲まれています。青森県最大の面積を誇る下北地方の中心都市であり、人口は約51,000人。豊富な自然に恵まれ、温泉や海の幸などを楽しめる観光地としても知られています。農業においてはトマト・夏秋苺・だいこん・アピオスなどが生産されています。高齢化率は34.3%、全国平均の28.7%を5.6ポイント上回っています。

主体組織のご紹介

合同会社むっつのたね 代表社員の峯里砂子(みねりさこ)さんを中心に活動されています。以下、ホームページより抜粋。 <https://www.62-tane.com/>

青森県下北半島のむつ市に2013年に移住。三方海に囲まれた冷涼な気候の下北半島の食に魅せられ、下北半島の食の伝道師として、下北の食と生産者を後世に繋いでいくお仕事をしています。地域の人・もの・場・技・知恵・縁を編んで、ステキなむつ・下北で、心地よく暮らすためのお仕事をサポートします!

峯さんはまちづくりの専門家としての活動を通じて下北地域の食の伝道師となり、やがて農業者とのネットワークがつくられて『むつ下北 援農ボランティア』という活動を開始しました。「ちょっと手が足りない」農業者と、機会があれば農業をやりたい市民の方々(高齢者・主婦・単身赴任者等)を繋ぐコーディネーター役を担っています。 <https://62en-no.jimdofree.com/>

ご当地では苺やトマトの新規就農者が増えてきており、苺の株の整理作業(枝や下葉の取り除き)やトマトの芽かき(わき芽の取り除き)など、急に手が足らなくなることがある、という相談があったことをきっかけに、県の委託事業として援農ボランティアが始まりました。

活動の内容と特徴

- **農作業内容**: 苺・ニンニク・菜の花・トマト・ブルーベリー・お花(お盆時期)・アピオスなど。
- **メンバー**: 高齢者(全体の30%程度)・主婦・単身赴任者・転職中の若い(20~40代)の男女・学校へ行きづらい若者など、登録者累計166人、LINE登録者40名、令和5年度のボランティア参加者は18名、のべ77人日、稼働日48日。事務局員1名(峯さん)と農家会員10名で構成。
- また、合同会社むっつのたね自らもアピオスの生産・販売・普及活動等を行っています。



実現要因と今後の課題

- **委託事業から会費制へ**: 初年度(令和元年)は県の委託事業によって活動が開始され、翌年度より農家会員10名から会費をいただいて運営を継続しています。このように、地方自治体の政策的関与によりきっかけをつくり、その後は実践者の方々がその必要性を認識し、恒常的な活動へと進化させていくことがひとつの理想のかたちであると考えられます。
- **財源の確保**: 県の事業としては単年事業で初年度のみ、翌年より農家会員5人の会費によって運営を継続することができました。このように2年目より自走できたのは、峯さんのご尽力と、農家会員の方々との信頼関係にあると拝察されますが、(峯さんへの)属人的な負担がかかっていると考えられ、「本当に役に立っているのか疑問を感じ、やめようと思ったこともある」という発言があったように、体制的な整備、(運営側、農家側、願わくば行政側などの)多様な仲間づくりが必要と考えられます。このような体制づくりのためには、一部の運営者に属人的な負担がかからないよう、行政機関の委託事業や補助事業などによる複数年に渡る財政面含めた支援など、理念を共有する多様な仲間づくりができる一定の活動期間を設けられるよう政策的に支援し、中期的に自走を促すような支援制度等が必要ではないかと考えられます。加えて、ボランティアのみならず、より労働的な助力を求める農家も一定数いるため、そのような労働力を提供できる機関との連携や、その機能もこの取組に中で担うなど、より広い地域ニーズへの対応が今後の課題と考えられます。

考察

『むつ下北 援農ボランティア』から学ぶ、「高齢者の農的活躍」のヒント

峯さんの「よそ者の目線」と、ネットワークの広がり

むっつのたね代表の峯さんが移住者ならではの目線で地域の食資源に新鮮な魅力を感じ、そこから派生した「地域食資源を支える農業者の力になりたい」「地域食資源の魅力を非農業者の方々を知っていただきたい」という思いが、この活動の原動力と考えられます。

そして、まちづくりの専門家・食の伝道師、さらには自らもアピオス生産をしているという農業者の目線で農家とふれあい、現場から感じられた課題やニーズをもとに『むつ下北 援農ボランティア』が始められたと拝察していますが、このように、市民側と農家側の両方の目線を持つコーディネーター役の存在が重要で、このような方々が連携し、農業者と市民の(願わくば行政機関等も加わった)ネットワークを内発的に広げていくことがひとつの理想のかたちと考えられます。

また、高齢者に限定せず、多様な市民を参加者として募っているが故に、結果的に多世代交流となり、参加する高齢者の方々の刺激や参加意欲の喚起にもつながっているのではないのでしょうか。

そして、このような活動を恒常的に継続させていくためには、普及啓発やそのための情報の定期的な発信が必要と考えられます。峯さんも「農家と市民の交流イベントを実施したい」とお話をされていましたが、このような活動が属人的な負担とならないよう、コーディネーター機関・農業者・市民・行政側など、相互的な支援体制をつくることが恒常的活動に向けた課題であると考えられます。

農都共生総合研究所 川辺 亮・引間 彩



藤里町社会福祉協議会

秋田県藤里町について

秋田県の北端、白神山地を望む人口2500人の町。主要な産業は農業で、ネギ、まいたけなどが有名である。人口減少が続いており、高齢化率は約50%である。

事業主体

社会福祉協議会は、社会福祉法によって定められた、全国すべての市区町村に設置されている民間組織である。藤里町社会福祉協議会は、介護事業、若者支援、生活支援、町づくりなどを幅広く行っているよく知られた社協である。

工夫

- 支援する人と、支援される人を分けない。高齢者だけを支援しようというのでは続かない。まちづくりに参加したい人を「プラチナバンク」として登録してみんなで山菜取りや畑の収穫を行っている。
- 藤里町の社協はもともとひきこもりの若者の支援で有名である。ひきこもりの若者が集いの場にいると、社協の高齢者もやってくる。高齢者はひきこもりかどうかなんてわからないので、普通に話している。後でひきこもりと聞いてびっくりしたりしている。ひきこもりの若者は、このような高齢者との自然な交流から自己肯定感を高めることができる。
- 若者を高齢者の「お世話」「介護」に使おうという発想をしばしば聞きます。これでは若者はついてきません。ひきこもりの若者も高齢者も両方輝ける仕組みを作ったからこそ藤里方式がうまくいっているのです。

きらりと光る活動

認知症カフェをしているが、ただ集まるだけでは面白くないので、実習の学生と高齢者を出会わせている。お互いに面白がっている。このカフェの名を「未知との遭遇カフェ」という。

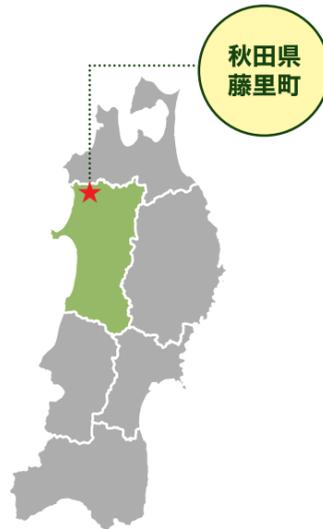
農を用いた活動

- 高齢者と若者が一緒に山菜取りに山に行く活動に、藤里方式の特徴がよく出ている。高齢者が山に山菜取りに行くと、杖を突いていた人が歩き出すこともある。山菜の場所も知っているのもものすごい勢いで山菜をとってくれる。しかし帰り道は大変だ。さすがに重い荷物はもてないからである。この時に若者が大活躍する。
- 名産品のまいたけを使った『白神まいたけキッシュ』はサクサクのスコーン生地に藤里町特産品のまいたけと比内地鶏の卵、生クリームやベーコンをたっぷり入れて焼き上げた贅沢なキッシュだ。

あなたの街で

- すべての市区町村に社会福祉協議会がある。社会福祉協議会の活動は多岐にわたり、市区町村ごとに、社協ごとに大きく異なる。社協のフットワークやエネルギーもさまざまである。熱心な社協があると藤里町のような活動も可能である。まずは社協のホームページを見てみよう。
- 私たちの研究でも「ひきこもりの若者が、何年もひきこもった後に、自分も親も年を取ったことに気が付いて、社会に出ようと思ったとき、農が受け入れやすい」という報告をしている(文献)。高齢者の支援だけで考えると袋小路に入ってしまうかもしれない。あなたの街のひきこもり支援はどうなっているか、調べてみてはどうだろうか？

Yamazaki S, Ura C, Shimmei M, Okamura T. In search of lost time: Long-term prognosis of hikikomori called 8050 crisis. Int J Geriatr Psychiatry. 2021;36(10):1590-1591. doi:10.1002/gps.5585
Yamazaki S, Ura C, Okamura T. Time regained: awareness of not young anymore is a trigger for the ageing Hikikomori person to return to society. Psychogeriatrics. 2023 Jul;23(4):730-731.



秋田県
藤里町

株式会社 風鈴

秋田県東成瀬村について

秋田県の南東、奥羽山脈を仰ぐ人口2500人の村。主要な産業は農業で、あきたこまちやトマトなどが有名である。人口減少が続いており、高齢化率は約40%である。

事業主体

老人ホーム、デイサービス、訪問介護をしている従業員22名(パート含む)の小ぶりだけど元気のいい会社。



工夫

- もともと社長もスタッフも農のことは全く素人であった。そのため、無理はしない、できることをする、利用者(高齢者)に聞きながらの
- んびりやるという姿勢でできている。なまじ農に詳しいと、あれもしたいとこれもしないと、と考えて苦行になってしまうことがある。老人ホームやデイサービスから歩いて行ける近ところに畑や田んぼを作っているの、移動が容易である。
- 田んぼ相撲、田んぼバレー、田んぼ綱引きなどもしている。とにかく楽しむ、遊ぶという姿勢が徹底している。



きらりと光る活動

みんなで餃子を作っている。餃子づくりは、皮づくり(触覚)、具材選び(前頭葉)、包む(手指緻巧性)、焼き(嗅覚)、みんなで食べる(会話)と実はリハビリになっているうえに楽しいのだ。要介護5で経管栄養だった人も、自分で食べるようになったというエピソードがある。「あ、いいかも」と思ったら楽しくみんなでやるのが否決かもしれない。

米は販売をしている。名前は「冥途の土産」という。



農を用いた活動

近所の畑をデイサービスの人が手伝いに行き、逆に農家の方がデイサービスの畑を手伝ってくれる。お金は介在しない。

あなたの街で

近くに田畑があるデイサービスや施設があるだろうか？アイデアにあふれた施設職員がいる施設はあるだろうか？どうせ仕事をするんだから楽しく真剣に遊びながらやろうという人はいるだろうか？



NPO法人 里・つむぎ八幡平 一般社団法人 すばる



岩手県八幡平市について

八幡平(はちまんたい)市は岩手県の北西部に位置し、旧安代町・西根町・松尾村の合併により誕生しました。人口約23,000人、広大な自然環境の中にスキー場や温泉などの観光施設が点在しています。楯状火山群の一部で、春から冬にかけて四季折々の景色を楽しむことができます。農業も盛んで、八幡平牛や安代(あしろ)りんどうは特産品として知られています。高齢者人口は全体の42.5%、全国平均の28.7%を大きく上回っています。

概要

「里・つむぎ八幡平」は、デイサービス・住宅型有料老人ホーム(まるごとケアの家 里・つむぎ)、グループホーム、小規模多機能ホーム他、里つむぎ農園などの運営を通して地域ニーズを汲み取り住み慣れた町で安心して暮らせるサポートを行っています。ホームページより <http://www.s-tumugi.jp/facility/> 4か所の高齢者施設それぞれに小規模の畑を整備し、職員が中心となって利用者とともに農作業を行っています。参加者数は15名程度、職員を除き全てが65歳以上の高齢者。別法人で就労継続支援B型事業所を運営しており、B型利用者が作業に協力することがある。また、農業法人(水稲・唐辛子・大豆・じゃがいも・ネギ・ニンニクや加工品など)や古民家食堂の運営も行っています。

きっかけ

- 高橋代表の母が認知症になったことをきっかけに「母の居場所づくり」のために高齢者向けの福祉事業所を開業。
- 農村地帯の八幡平市では何らかの形で農業を行ってきた方々がほとんどであるため、「身体が元気な頃の農業経験を思い出していただき、心身ともに生きがいを継続できるように」との思いで行っています。
- また、時折は「こんなこともできなくなった」と嘆く方もいるため、対応の仕方に工夫を凝らしています(下記参照)。



参加者の疾患と、参加を促す工夫

- **疾患**: 認知症、高血圧、老人性うつ、喘息、脳血管障害、逆流性食道炎、糖尿病、骨粗鬆症、廃用症候群、高脂血症、パーキンソン病、腰痛など。
- **症状**: 孤立や孤独、モノの溜め込み、妄想、帰宅願望、不眠、生きがいの喪失、病への不安等。
工夫: 認知症の方々が中心であるが、参加者は一定程度動ける方と意思疎通ができる方を対象としている。また、車椅子の方でも声掛けや作業指導はできるため、興味ある方には参加いただいている。声かけは、お手伝いをしてほしい、農業のことはよくわからないから教えてほしいなど、教えるをうかたちを心がけています。
- **留意点**: 現在の本人の把握だけでなく、生活歴をしっかりと聴取し全人的に対応すること、家族との関係性の維持に努めています。

農的活動を行う畑について

- 各施設に隣接しており、一番遠い畑で30m程度の距離。面積は6畳程度から広いところで20坪程度。目に見える範囲で野菜の生育状況が分かり、畑を身近に感じることができます。



農的活動の内容

- 自給用にトマト・発芽大根・サツマイモ・きゅうりなどを栽培しています。
- 例年4月後半あたりから始動し、土作りと畝整備、マルチ掛けは職員が行い、利用者は主に苗植え・種まき・支柱立て・草取り・間引き・収穫等に従事する。春植えと秋植えに分け、11月後半まで活動を行っています。
- 農業法人の収穫や雑草取りを手伝う場合もあります。

活動を通じた高齢者と職員の変化

- まだ働くことができるという思いや、自身の役割を実感できる方は、明らかに前向きな生活が維持できており、維持できる期間が長くなっているとも言えます。春から生育に関わり、収穫を迎えた時の笑顔には、傍目に見ても別格の喜びを感じます。普段の施設生活ではなかなか見られない表情を見ることが出来ます。
- 適切な段取りを組んで行わないと怪我等のリスクが付きまとい職員のマネジメントが問われるため、日々が学びになっていきます。また、農業を通じ、認知症の方でも農作業に対する深い知識を持っていることが分かり、その方の新たな側面に気付くことも多くあります。



やりがい

- 疎外感を感じていたり生きがいを失っていたように見えた方の表情が変わり、コミュニケーションが増えていく様子を見ると良かったと思う。やれることはまだ残っているのに、周囲の思い込みなどによって自身を喪失させてはならないと考えるようになりました。

今後の展望

- 2年前から農業法人で栽培する野菜の販売と地域交流を目的として、5月から11月まで月1回マルシェを開催しており、徐々に来場者も増え交流の広がりが見えています。来年は、地域の方々にフットケア教室を開催し、爪の予防・ふくらはぎマッサージの仕方などを指導したいと考えています。また、コロナで中断していた映画上映会、介護教室等も復活させたいと考えています。やはり仕掛けることも必要だと思います。



考察 NPO法人 里・つむぎ八幡平 / 一般社団法人すばるから学ぶ、「高齢者の農的活躍」のヒント

高橋代表の異業種のノウハウと農家出身ならではの地域への愛着

施設を訪れると、看板やオーナメントなどに、海外生活も経験され、インテリアや雑貨業、サービス業等を行っていた高橋代表のこだわりやセンスが其処此処に感じられます。そして、NPOによる高齢者や障害者向けの施設や古民家食堂、一般社団法人による障害者のための就労継続支援B型事業所や農業部門など、活動が多岐に渡りますが、その原点にあるのは、高橋代表を中心に培われているホスピタリティと地域(八幡平市)への愛着であると拝察します。そのため、地脈・地縁を活かした活動を続けるとともに、新たな商品づくりやサービス、ビジネスモデルに常に挑戦しながら、「母のような方々の居場所づくり」を地域活動の一環としても行いながら、経済性と社会性のバランスを上手にとられながら恒常的かつ革新的な活動を続けられていくことと思われまふ。

農都共生総合研究所 川辺 亮・引間 彩

本田ファーム

団体・取組の概要

団体名	本田ファーム
所在地	宮城県登米市本田行政区 *人口約200名/122戸
設立年	2011年
構成員数	19名(うち65歳以上は11名)
耕地面積	80坪



団体・取組の特徴

- 2000年代以降、高齢化や耕作放棄地の増加など地域の課題が顕在化してきた中、耕作放棄地を活用し、町内会活動として活動を開始
- 構成員は子どもから高齢者まで多様
- 活動の参加量に応じて歩合制にて収穫物を分配(余った収穫物は地域の独居高齢者などに配布)

経営資源に焦点を当てた整理

行政区の住民が 年齢関係なく参加 (作業ができない方も包摂)	行政区の住民所有の 耕作放棄地を活用 (地域の遊休資源の活用)
人	物
資金	情報
立ち上げ期は行政事業 以降は町内会費を活用 (自走モデルを構築)	行政・社協と 関係構築 (域内主体との協力体制を構築)



農的活動の内容

宮城県登米市にて活動する「本田ファーム」では、地域の耕作放棄地(80坪)を活用し、町内会活動の一環として、農的活動を展開しています。本活動では、19名の構成員のうち11名が高齢者となっており、高齢者の方でも気軽に参加できるように1回の作業時間を短く設定したり、作業内容を細分化し参加者の特性に応じた関わりしるを提供。春はジャガイモ、秋は大根や白菜などを栽培しながら、活動への参加量に応じたポイント制にて収穫物を分配しているほか、余剰収穫物は地域の独居高齢者へ見回りも兼ねお裾分けをするなどといった活動も行っています。



農業経験者に技術指導を受けるなど高齢者の方が持つ経験や技術を輝かせることができるような活動としていること、収穫物の分配結果に不平・不満が出ないようなポイント設計をしていることが特徴的であり活動継続のキモであると窺われます。

また、参加する高齢者の方のやりがいづくりや健康増進に寄与しているほか、耕作放棄地を舞台とした農的活動を起点に世代間交流や見守り活動へも繋げているなど、多様な社会的意義を発揮しています。

今後は、より一層地域の高齢化が進む中、活動を続けていくために、新たな担い手として学生を巻き込んでいくという構想を描いています。

宮城大学 神尾 真太郎・佐々木 秀之・作田 竜一



向陽台連合町内会 向陽台ささえ愛の会／ 青空サロン

概要

この事例は、宮城県仙台市泉区の古いニュータウンの住宅地における町内会活動をベースとした「農的」活動の取組です。

農業生産が行われていない住宅地であるため、地域の営農活動の人手確保の要素は無く、「農的」活動はあくまでも地域活動の推進ツールとして行われています。

また、町内会では、「住み慣れた向陽台で、豊かなところでいつまでも暮らし続けたい」という住民の希望を地域活動の基軸として、主に高齢者を対象とした共助による様々な取り組みが行われています。その中で、地域の基盤となる資源である人（ボランティア活動の「ささえ愛の会」と土地（空地を活用した「青空サロン」）の2つの取組が連携することで、「農的」活動を地域福祉の要として地域の「力」としています。



宮城県
仙台市

① ささえ愛の会 開始時期：平成28年（9年間）

有償ボランティアによる日常生活支援

（草取り、病院の送迎、ゴミ出し、買い物支援、室内片付けなど相談に応じて対応（1時間600円：利用料はボランティアと会でえ1/2に分配）

→窓口は向陽台地域包括支援センター

（農的活動が地域福祉の要として機能）

- ・収穫された野菜は、移動販売の買い物客に提供
 - ・後期高齢者世帯や1人世帯を訪問するきっかけとして栽培した菊谷白菜をお裾分け
 - ・自宅の菜園を耕してもらうなど重い農作業のボランティア支援（日頃の栽培は自分で）
- ※両者とも泉区社協独自の福祉事業振興助成金10万円/年を活動基盤として活用

② 青空サロン

（屋外サロン活動：地域の会館の跡地を利用して開催）平成29年（8年間）

週1回の移動販売車来訪の買い物ついでにお茶のみ、寄り道サロン、男性の活躍の場として野菜栽培（菜園設置）

図 地域福祉を担う2つの活動の関係（聞き取りにより筆者が作成）

菜園の農的活動と様々な地域活動の関係

この地域での「農的」活動は「青空サロン」で、地域活動への男性の参加促進と活躍の場を作るため、小規模（9m×9m）の菜園で活動を開始しました。

菜園で年間を通じた野菜を栽培することで、野菜作りを実践する高齢者への効果に加えて、収穫された野

菜は他の地域活動の推進ツールとしての活用も意図されています。

具体的には、買い物支援の移動販売車が来訪する日と菜園の作業日を合わせ、買い物客に収穫した野菜をプレゼントすることで、野菜作りの目的や意欲を高めるとともに移動販売車の集客に役立つ相乗効果を狙っています。更に、地域活動に参加し難い後期高齢者とのコミュニケーションの確保の手段として、「収穫物をお裾分け」することをきっかけとして訪問するなど、「農的」活動はボランティア活動の一端を担い運営されています。



小規模な菜園での季節を通じた多品目の野菜作り



夏野菜の収穫物と秋冬野菜の買い物客への配布

この取組の特徴と強み

- 買い物や散歩のついでに立ち寄り身近な農園とボランティア活動の一端を担う
→地域内で小規模、かつ、多くの住民が関係できる
- 共助による地域福祉の取組の中に位置づけ
→収穫された野菜を地域の「他の取組」の推進ツールにも活用
- 地域福祉の視点で「少しでも長くここに住み続けたい」が目的
→「農的」活動を最終目的とせず、地域福祉の要として機能させることで持続的な取組を実現（約10年の継続実績）
- 町内会活動として他の様々な経費や人的資源を工夫して活用
→社会福祉協議会から福祉事業振興助成金10万円/年を両取組とも受給（基盤が確実）

今後の課題

- 菜園の場所には、R8年度に集会所が建設予定
→小規模なので移転して継続することを検討
- 現在の65歳以上の参加者は25名と発足当初から半減！次世代の担い手育成が課題
→町内会の他の活動と更なる連携を模索中。
- 「自宅の菜園を耕してもらう農作業ボランティア支援」は新たな展開ニーズとし注目！

まとめと期待

本事例のように地域に住み続ける手段の一つとして「農的」活動を取り入れることは、地域の基礎的な資源である人と土地の活用であり、どこの住宅地でも実践できる可能性がある普遍的、ユニバーサルな取組です。しかし、本事例のように「農的」活動と幅広いボランティア活動の連携が意図的に行われている地域は多くはなく、また、意識されていないかもしれません。多くの地域で既に行われているであろう「農的」活動を地域福祉の要と位置付ける意識の転換が行われることにより、日本全国の住宅地にいわば「町内会ユニバーサル農園」とも言える持続的な活動が広がるのが期待されます。

宮城大学 作田 竜一

かたひらの畑

福島県郡山市について

郡山市は、福島県の中部に位置し、面積757.20km²、総人口約318,000人。東北地方において仙台市に次ぎ第2位の経済規模を誇る都市です。農業も盛んで、水稲やキャベツ、にんじん、大根、ねぎ、トマト、りんご、梨、桃、ぶどうなど、多様な作物・果樹を生産しています。高齢化率は27.1%、全国平均28.7%よりもやや低い水準です。

取組概要

- **会の目的**(会則より)「この会は、農に関する活動(事業)を中心におこなうことを通して、農と人と食をつなぎ、地域の福祉・医療・生活・コミュニティ等の課題を解決する手だてのひとつになることを目的とし、誰もがその存在を認め合える場づくり、地域作りをおこなう」。
- 高齢者のみならず、障害の有無や年齢、社会背景を問わず誰もが参加できるユニバーサル農園を運営しています。植え付けや収穫などの農作業だけでなく、焼き芋や漬物づくりなども行っています。
- **参加者**:老若男女、様々な団体がボランティア会員として活動し、地域内の学校や福祉施設の農業体験の場として活用されています。好きな時に自由に過ごせるため、多様な人々の居場所となっており、農繁期には月に約50人以上が訪れています。
- **多様な生産物**:小玉スイカ・つる紫・玉ねぎ赤と黄色・山芋・アスパラガス・コカブ・茗荷・ヘチマ・自生セリ・ブロッコリー・ニラ・トウモロコシ・ニンニク・白胡麻・サツマイモ・ジャガイモ・里芋・菊芋・絹さや・スナップエンドウ・ニンジン・グリーンリーフレタス・バジル・キュウリ・唐辛子・など。

きっかけと経緯

- (社福)にんじん舎の会の現場職員リーダーであった和田氏为中心となり、平成21年度に農林水産省「農と医の連携促進事業」の交付を受け、高齢者の農的活動における機能回復や機能低下防止への貢献についての実証プログラムを策定し、かたひら農場で実施しました。
- プログラムにあたっては、園芸療法士、管理栄養士、県の職員など多様な人々の力を借りながら、「多様な人々が参加しやすい農場の環境整備」を行いました。
- その後、令和元年ににんじん舎の会が同農場を閉鎖することとしたため、同会を引退した和田氏が農場を引き継ぐかたちで「かたひらの畑活用会議」や「みんないっしょ with us」などのプロジェクトを立ち上げ、『かたひらの畑』として新たな活動を開始しました。
(詳しくは『ユニバーサル農園のススメ』<https://www.notosoken.jp/noufuku/r4/universalfarm/> 参照)
- 現在は、個人や団体による活動会員・賛助会員・ボランティア会員によって活動しています。団体は、社会福祉法人、保育園、B型事業所、放課後デイサービス(NPO)など。
- 農作業には、上記以外にも体験(イベント)で多様な方々が参加しています。
- 地元小学校や保育園の子ども・職員・家族、福祉事業所の利用者と職員、市社協の就労体験事業参加者と職員、会員の知人(認知症、癌治療中や難病の高齢者等)など。

活動を継続する工夫と問題意識

- 高齢者対象という意識はないが、適材適所で「得意なこと」「やれること」「お願いしたいこと」「やりたいこと」をやってもらっています。何もせず眺めているのも口だけ出すのもあり。高齢者の経験や知恵を借りながらやっています。
- みんな同じである必要はなく、農を通じて参加者それぞれが「あんたがいないと困る」と言い合いながら「迷惑をかけあえる畑」であればと思っています。この畑はみんなの居場所であり楽しい場所であってほしい。



- 高齢者と活動を共にする時間と場をつくりながら、高齢者から学んだ、かたひらの畑のキーワードである「お裾分け」や「捨てない」がみんなの活動規範になればと考えています。
- 農そのものにたくさんの魅力があるが、食べる・こども・生活体験は重要なキーワード。ごちゃまぜの活動であるため、収穫や加工してその場で食べながら、高齢者が保育園や学童保育、小学校の子供たちに自慢げにいろいろ話しながらうれしそうにしている姿を見ていると、このような場所はやはり必要なのだと感じます。
- 高齢者には経験や知恵があり、仕事や子育てから解放されて時間的余裕があっても、人や社会とのつながりや、あてにされること、頼りにされること、おひさまの下で身体を動かすこと、が減少し、結果として孤立・孤独・無気力・うつ・悲観的否定的思考・身体機能や認知機能の低下などを引き起こしている高齢者が多いのではないのでしょうか。そのような方々が活躍する畑であってほしいと考えています

参加者の変化

- 農は高齢者になじみのある活動(太陽の下で身体を動かし、採って、食べる)だと考えています。そのような人生経験で培われた「農や食の知恵」を子どもや若い人たちに伝えるため、高齢者が教える「次世代に引き継ぎたい農業や保存加工の学習会」を開催しています。
- 高齢者の人生経験と知恵から学び、高齢者がやれなくなっていることを子どもたちや生きづらさを抱える若者たちが行うことで、互いを必要とする場面が生まれ「迷惑をかけあえること」の大切さを感じ合えることが必要であると考えています。

課題

- 体験(イベント)から日常の活動へ進化させるには、活動を恒常化させるには何が必要かを考え続けています。高齢者だけでなく、生きづらさを抱えた人たちがごちゃまぜで活動できる当たり前の場所であるために、「体験」を通じ「日常」の場へと発展するよう、活動のあり方を模索しています。



考察

かたひらの畑から学ぶ、「高齢者の農的活躍」のヒント

和田氏が当時(農水省の実証事業実施時)を振り返り「農業そのものが高齢者に良い影響があるのかはわからなかった」「当時は保育園やその親達で農作業を行っていたが、そこに高齢者を入れることで活動の拡がりが見られるのではと考えた」と語っています。

そして、結果として「農作業を通じ農村生活の記憶が蘇ることで、認知症高齢者の方々が子供たちやその親と話すようになり、自ら畑作業を始めるなど能動的に動き始めたことに、施設のスタッフの方も驚いていた。農は認知症の方や生きづらさを抱えている方々にとっても重要だと、新たな気づきを得ることができた」と述べているように、かたひら農場を集いの場とした世代間交流が生まれ、それが認知症高齢者の方々の能動的な活動を促していることが窺えます。

このように、高齢者のみならず子供やその親、いろいろな事情を持つ若者など、和田代表の言う「ごちゃまぜ」な人々が集い、協働・協力の場がつけられながら相互に支え合うコミュニティが形成されていくことは、地域社会にとって不可欠であると考えられます。

そのような「ごちゃまぜの場」に、企業(産)や自治体(官)や大学等の教育機関(学)が加わり、財政的にも社会的にも支え合う仕組みが構築され、和田さんのようなリーダーや共感する人々や組織が主体性や主導性を維持しながらも、それら活動が無理なく継続でき、さらには継承できるような支援制度等が設けられることが望ましく思われます。

農都共生総合研究所 川辺 亮・引間 彩

1 「共生社会を創るポジティブな行動 ～新潟県・多機能型拠点ビニールハウスの居場所“まるごと”」

共生社会は社会福祉各分野の共通の目標になっています¹⁾²⁾。精度や分野を超えて、地域住民が多様な主体が、つながることで一人ひとりが尊厳を保持しつつ希望をもって食わすことができるよう様々な取り組みが始まっています。

新潟県西蒲区の農村部ビニールハウスを活用したこの活動には、定年後のシニア、認知症の人やその家族、統合失調症を抱える方、引きこもり経験者、子どもたち、学生や福祉専門職など多様な人々が集まります。主催する岩崎典子さんの実家のビニールハウスに週一回月曜日に集まり、敷地内の畑で野菜を育て収穫し、調理まで行います。美容師や介護タクシーの運営者もいて、この場所で散髪も行う人もいます。子どもが安心して遊べる砂場もあります。参加費用は1回300円。社会福祉協議会やケアマネ、関係者の声掛けで広がり、現在のメンバーは25名程度。この場所は、働く場であり、ケアと子育て、福祉や学びすべてが丸ごと循環する居場所。農作業は楽しく、福祉も楽しい、困りごとの解決ではなく、そのポジティブな掛け合わせから生まれた場所が「まるごと」です。

高知県立大学社会福祉学部 教授 矢吹 知之

1)厚生労働省地域共生社会のポータルサイト
<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/> (情報アクセス日 2025年3月1日)
 2)内閣官房認知症施策推進本部
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ninchisho_suishinhonbu/index.html (情報アクセス日2025年3月1日)



2 「ひきこもりと農的活動について」

近年、ひきこもりの長期・高齢化が進み、高齢の親が中年の子を支え続ける状況が問題視されています。親子ともに社会から孤立しがちであることから、早急な支援と共に、多様な受け皿の確立が必要です。

私たちの研究では、27年もの長いひきこもり生活を経て社会復帰した当事者が、まずは水耕栽培の手伝いから始めて、徐々に社会活動を広げることで前進できた事例や、畑作業を取り入れた当事者のための通いの場について、「話さなくても不自然ではない」と、安心感を抱いていた事例も見出しています。彼らは育てた農作物を他者と共有することで、これまでにない達成感も得ていました。こうした農的作業は、長年に渡り他者との交流が乏しかったひきこもり当事者にとって、焦らずに時間をかけて社会と関わることができる点で、極めて有用であると思われます。また、中年のひきこもりを抱える高齢の親にとっても新たな居場所となり、家族全体の孤立を防ぐ役割をも果たすことができるでしょう。つまり、ひきこもり問題における新たな受け皿として、農的作業の場は大きな希望をもたらすと考えられます。

文京学院大学 山崎 幸子

【文献】
 Yamazaki, S., Ura, C., Okamura, T. (2023). Time regained: awareness of not young anymore is a trigger for the ageing Hikikomori person to return to society. *Psychogeriatrics*, 23,4,730-731.
 山崎幸子・宇良千秋・岡村毅. 中高年ひきこもり者が再び社会とつながるまでの過程. (2023). *老年社会科学*, 45, 3, 213-224.



3

東北における高齢者の農的活躍のすすめ ～農業を活かした、高齢者の生きがいと役割づくり・ 社会貢献と社会参加の促進に向けて～

「高齢者の農的活動における諸外国の試み ～場づくりの視点から～」

諸外国では、高齢者の健康増進と社会的つながりを目的に、都市や農村で農的活動の場が整備されています。オランダでは、1990年代から農業を通じて障害者や認知症高齢者、薬物中毒者などを支援するケアファームが展開されています¹⁾。オランダのケアファームは、①広大な農地でゆったりと農作業を行い、精神的な回復や自信の獲得を目指す「多面的効果型」、②施設に隣接した小さな空き空間を活用して健康増進のために農作業に参加できる「パブリック・ヘルス型」、そして③都市公園の一部などを農園として利用し、教育や貧困、薬物問題など地域課題の解消を目指す「ソーシャル・インクルージョン型」の形態で展開されています^{2&3)}。

またシンガポールは、2030年に人口の4人に1人が高齢者となることを見据え、高齢者のケア充実や社会貢献、世代間のつながりを充足させるためのアクションプランを2023年に発表しました⁴⁾。高齢者がつながりを醸成する場所として、シンガポール国立公園庁(通称NParks)は2015年から進めているセラピューティックガーデンの整備促進とネットワーク化を掲げています。NParksが2017年に発行した「シンガポールにおけるセラピューティックガーデンの設計ガイドライン」では、認知症高齢者に配慮した具体的な空間デザインの指針が幅広く盛り込まれています⁵⁾。今後シンガポールでは高齢者のケアだけでなく、アクティブシニアが生き生きと地域で働き、社会とつながるための機会と場が求められていることから、ガーデン空間のマネジメントを通じた雇用の創出も期待されるでしょう。

東京大学大学院 農学生命科学研究科 農学国際専攻
包摂型グローバル未来社会寄附講座・特任講師
別所 あかね

- 1) J. Hassink, H. Agricola, E. J. Veen, R. Pijpker, S. R. de Bruin, H. A. V. D. Meulen, L. B. Plug, The care farming sector in the Netherlands: a reflection on its developments and promising innovations, Sustainability, 12 (9), 2020, 3811.
- 2) B. B. Bock, S. J. Oosting, A classification of green care arrangements in Europe. In J. Dessein, B. B. Bock (Ed.), The Economics of Green Care in Agriculture, 2010, p. 15-26, Loughborough University.
- 3) 植田剛司、『オランダケアファームの機能とその充足要件—日本の農福連携の発展に資するために—』農業経営研究、2021、58(4)、15-20.
- 4) Ministry of Health, Singapore, Living Life to the Fullest: 2023 Action Plan for Successful Ageing, 2023, Accessed February 25, 2025, URL: <https://www.moh.gov.sg/others/resources-and-statistics/action-plan-for-successful-ageing>.
- 5) National Parks Board, Singapore, Design Guidelines for Therapeutic Gardens in Singapore, 2017, Accessed February 25, 2025, URL: https://www.nparks.gov.sg/-/media/nparks-real-content/gardens-parks-and-nature/therapeutic-gardens/therapeutic-garden-in-singapore-book_forview_digital.PDF



4

都市計画と高齢者の農的活動

近年、持続可能な開発目標 (SDGs)に関連する課題として、誰もが社会参加できる場づくりの重要性が増しています。

一方で、人口減少が進む中で、すべての地域で活動の場を提供・運営することは難しくなっています。活動の場を整備するだけでなく、都市公園などの既存インフラの維持も課題となります。日本全国の大規模データを用いた研究では、裸地が多い居住地は住民にとって好まれないことが定量的に確認されています¹⁾。

高齢者の農的活動は、誰もが社会参加できる活動として、また都市公園や空き地を有効活用する一例として注目されています。農的活動は、栽培だけでなく、収穫後のイベントや運営にも多様な参加者が関わることで、地域に賑わいを生み出すことができます²⁾。また、都市公園・空き地を活動の場として提供するとともに、関わる予算の一部を高齢者の農的活動への補助金として活用することで、維持管理費用の削減が期待できます³⁾。このように、高齢者の農的活動は都市計画や運営において、多くの可能性を持っていると考えられます。

一橋大学社会科学高等研究院・講師 キム ホンジク

- 1) C. Li & S. Managi, Land Cover Matters to Human Well-being, Vol. 11, Scientific Reports, 2021, 15957.
- 2) H. A. Okvat & A. J. Zautra, Community Gardening: A Parsimonious Path to Individual, Community, and Environmental Resilience, Vol. 47, American Journal of Community Psychology, 2011, 374-387.
- 3) 秋田典子・高村学人・宗野隆俊、『コミュニティの主体性が発揮される公共空間の生成プロセスの解明—コミュニティガーデン型の土地利用を対象として—』住総研究論文集、41巻、2015、205-216.



農園は認知症ケアの社会資源 ～新潟県上越市、東京都板橋区の事例から～

新潟県上越市におけるケア・ファームの効果

オランダには、ケア・ファーム(知的障がい者や精神障がい者、認知症高齢者、長期失業者などを対象とした治療やリハビリテーション、交流のための農園)が1,500ヶ所以上あるそうです。私たちは、日本の認知症高齢者にもケア・ファームが馴染み、精神的健康にも良い影響をもたらすのではないかと考え、アジアで初めてケア・ファームの効果に関する実証的研究を始めました。はじめに、新潟県上越市の精神科病院に通院する認知症をもつ8名の方(このうち男性が7名)を対象に稲作を中心とした週1回90分、約半年間の農園プログラムを実施しました。田植えや稲刈りの作業は、昔ながらの手作業で行い、時間内にやりきれなかった作業は、ボランティアの住民が機械で仕上げました。また、田植えと稲刈り以外の時期は畑で野菜を育て、収穫したものを皆で調理して食べました。参加者のほとんどが農業経験者でしたので、独力で作業をすることができ、若いスタッフに教えることもできました。終わってみると、全25回の平均出席率は93%に達し、プログラム終了時には参加者のうつ症状が改善し、精神的健康が有意に向上していました¹⁾。参加者からは「毎週皆に会うのが楽しみだ」という声が聞かれ、付き添いで来ていたグループホームの職員からは「こんなことができる人だとは思わなかった」というような反応もありました。その後の研究で、稲作ケアの参加者は通常のデイケアの参加者と比べても精神的健康が有意に改善したこともわかりました²⁾。



上越市での田植えの様子

都市部におけるケア・ファームの効果

私たちはケア・ファームの研究成果を都市部にも適用したいと考えました。縁があって東京都板橋区内の小学校跡地の花壇を活用できるようになりました。認知機能障害をもつ高齢者と一般高齢者の計15名(このうち6割が男性)と地域住民が参加しました。土づくりから始めて、きゅうり、トマト、茄子、水菜、ズッキーニ、かぼちゃ、みょうが、小玉スイカ、枝豆、万願寺唐辛子、パプリカ、ブロッコリー、芽キャベツ、イチゴなど、様々な種類の野菜や果物を育てました。知的障害をもつ子どもが水やりに来てくれたり、近くの保育園から毎日子どもたちが遊びに来たりして、物珍しそうに野菜や果物を観察していました。いつのまにか小さな農園は多様な人が集う場所となりました。そして、活動を始めて6か月後には、対象者に認知機能検査の得点向上、対人交流頻度の増加、うつ症状の改善などの効果がみられ、都市部でのケア・ファームの効果や実行可能性が高いことが示されたのです³⁾。



都市農園での作業の様子

農園は認知症ケアの社会資源

私たちは、農園は認知症をもつ人の残存能力や強みを生かせる(Strength-based approach)、そして、地域の人と共に取り組める(Community-based approach)、認知症ケアの重要な社会資源であると考えています。従来の老年学では、年をとっても健康でproductive(生産的)に生きることには価値がおかれてきましたが、人生100年時代となれば、90歳を過ぎればだれもが何かしら障害とともに生きることになります。農園はそのような人たちを包摂する場として活用できるのではないのでしょうか。認知症をもつ人やその家族が、田園風景に囲まれて、なじみの仲間と農作業をしながら共に時間を過ごせるDementia-friendly Farms(認知症にやさしい農園)が日本にもたくさんできたら素敵だと思いませんか。

東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 宇良 千秋

【文献】

- 1) 宇良千秋, 岡村毅, 山崎幸子, 石黒太一, 井部真澄, 宮崎眞也子, 鳥島佳祐, 川室優: 認知機能障害をもつ高齢者の社会的包摂の実現に向けた農業ケアの開発: 稲作を中心としたプログラムのフィジビリティの検討, 日本老年医学会雑誌, 55(1):106-116, 2018.
- 2) Ura C, Okamura T, Yamazaki S, Shimmei M, Torishima K, Eboshida A, Kawamuro Y. Rice farming care as a novel method of green care farm in East Asian context: an implementation research. BMC Geriatrics. 21, 237, 2021. <https://doi.org/10.1186/s12877-021-02181-2>
- 3) Ura C, Okamura T, Taga T, Yanagisawa C, Yamazaki S, Shimmei M. Living for the city: Feasibility study of a dementia-friendly care farm in an urban area. International Journal of Geriatric Psychiatry. First published: 07 August 2022 <https://doi.org/10.1002/gps.5794>

終章

調査を始める前に、高齢者のための農的な活動については、福島県郡山市のかたひらの畑、岩手県花巻市の高松第三行政区の福祉農園、秋田県藤里町の藤里社会福祉協議会の取組などの情報がある程度把握していましたので、東北各県に本格的に調査をかけたら、どれだけ素晴らしい事例が発掘されるのかと楽しみに、この報告書を執筆いただいているチームメンバーの皆さんと一緒に調査を開始しました。

ところが、各県に調査票を配って、調査を依頼はしてみたものの、どうもはかばかしくない集計結果となってしまいました。この点は、岡村先生のまとめられた調査結果報告を読んでいただければわかる通りです。

他方で、チームメンバーで手分けして、現地の事例を探し出して、実際に調査を行って見たところ、調査当初に期待していたような素晴らしい取組が各地で既に行われていることも明らかになりました。

このギャップはどこからくるのでしょうか。それは、素晴らしい取組が行われていても、それが、地域全体で共有されておらず、調査を依頼された各県の担当の方々も、そうした素晴らしい取組の存在を把握できず、結果として報告が集まってこない。こうした状況が各地に存在することで、悉皆的な調査票による調査と現地調査との間にギャップが生まれてしまったのではないかと考えています。

しかも、素晴らしい取組をされている方々が、謙遜もあるとはいえ、自分達の取組の素晴らしさに気が付いていないのではないかとと思われる調査報告も上がってきています。

これらから見てくることは、①取組の効果に関する客観的な把握が行われておらず、当然ながら共有もされていないのではないかとということと、②各地の取組の関係者が繋がっておらず、ノウハウや課題の共有化ができていないのではないかとことです。この状況は、働ける障害者が、人手不足の農家や農業法人にお手伝いに行く形で農福連携が爆発的に拡大する以前の、農福連携の黎明期に大変似ています。当時は、素晴らしい取組が行われているものの、それは、異なった地域にそれぞれ点在し、つながっておらず、人々が広く知るところとなっていませんでした。東北の高齢者のための農的な活動は、まさに、その時の農福連携の状況に酷似している気がしています。

この報告書でも、コラムで、日本各地だけでなく、世界各国でも、高齢者のための農的な活動が着実に広がっていることが報告されています。それは、そうした取組が必要とされ、効果が認められて、地域の人々に支持されているからではないでしょうか。今回の調査で、東北地方でも、タケノコが生えてくるように、各地で素晴らしい取組が生まれ始めていることが明らかになりました。東北地方における高齢者のための農的な活動が、今回の調査と報告を機に、大きく拡大し、それぞれが繋がることで、農的な活動を通じて幸せな高齢者が各地で大きく増えることを切に願って、この文章を終わりにしたいと思います。

皆さんも、是非、高齢者のための農的な活動の拡大や定着のためにご協力をお願い致します。

千葉大学 吉田 行郷

応援 メッセージ

本研究は、私たち日本人が食料生産の手段として営んできた農業に、「関わるすべての人の幸せ」という新たな意義を与える大変意義深いものであると考えています。令和6年に策定された「農福連携等推進ビジョン(2024改訂版)」においては、「各地で育まれてきた農福連携等の知恵やアイデアは、世界に先がけて少子高齢化や人口減少に直面する課題先進国・日本ならではのソフトパワーである」とされています。本研究が、今後、農業と医療の連携に関する先鋭的なエビデンスの取得を通じて、世界に冠たる研究として羽ばたいていくことを祈念しております。

農林水産省 農村振興局 都市農村交流課 農福連携推進室長
渡邊桃代